

## 第 97 回例会報告



## 講演と交流の集い 石川慶監督 ポーランド映画の魅力を語る!

ポーランドのウッチ国立映画大学で学んだ石川慶監督にクシシュトフ・ケシロフスキ監督の『デカログ』を中心にポーランド映画の魅力を語っていただきました。

新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が9月未まで延長されたため、急遽、会場を札幌エルプラザから北海道クリスチャンセンターに変更して開催しました。参加者は会員・一般・講師合わせて12人でした。以下は講演の抄録です。

北海道はヨット部に所属していた東北大学時代、北大との交流のために何度も訪れた馴染み深い土地。仙台は岩井俊二監督の出身地でその影響は大きかった。卒業の年が就職難だったこともあり映画の道を志した。

映画を学ぶため世界中の映画学校を調べた。アメリカの学校は学費が高く行けそうもない中、レベルが高くても学費も安く国の支援が得られる旧共産圏の学校に興味をもった。なかでも東西ヨーロッパの両面を併せ持つポーランドに惹かれウッチ映画大学に入学することになった。

ウッチはアンジェイ・ワイダ、ロマン・ポランスキー、ケシロフスキなどポーランドを代表する映画監督のほとんどを輩出している。英国で活動していた『COLD WAR』のパヴリコフスキ監督などは例外的存在だ。ウッチでの実習はすべて35ミリフィルムを使う。2005年に最初の実習作品として、聴覚障害をもつ日本人とポーランド人の夫妻のビデオレターを題材にしたドキュメンタリー『Co slychać?』を制作した(スクリーンで鑑賞)。

ケシロフスキは現在のポーランド映画界に最も大きな影響を与えた監督だ。その影響力はワイダ以上。ケシロフスキは記録映画から出発しているが、日本のドキュメンタリーと異なるのは、フィクション的手法を取り入れている点。ケシロフスキには主題が何であっても自分の目線で作れるという確信がある。

1980年代以降、ケシロフスキは制作の中心をド

キュメンタリーからフィクション作品に移していった。戒厳令下の1981年に『偶然』が上映禁止となり、以後、関心は国外へ向かうようになる。『デカログ』はこの世の中で人間が持ちうる葛藤のカatalogと言っている。自分の中の辞書のようにこれからも見続けていこう。

講演後、シアターキノ代表の中島洋さん(本会員)の進行で、交流会が持たれました。

中島さんはデカログの舞台になっている団地について、高度成長期の日本の住宅事情を絡めて発言。これを受けて石川監督は、ケシロフスキにとっての主題はあくまでも現在のポーランドであり、団地はそうしたケシロフスキの被写体との距離感を示していると述べられました。

また、ケシロフスキ作品から受けた影響についての質問には、簡単には共感させてくれないところ、安易な感情移入を拒否しているところと答えられました。さらに、参加者からケシロフスキ作品へのドストエフスキの影響について発言があったり、中島さんから枝裕和監督が自身の映画監督としての出発点として『トリコロール／青の愛』を挙げているとの紹介があったりと、興味尽きない話の連続で、あっという間に予定の2時間が過ぎました。

石川監督、中島洋さん、お忙しい中、貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。

(園部真幸)



## ケシロフスキ映画とドストエフスキ 池田 光良

ポーランドが生んだ巨匠クシシュトフ・ケシロフスキ監督の作品にはドストエフスキの影響が感じられる。それについて簡単に考察してみたい。

## 1. 神と魂の不死がなければ全てが許される?

これは『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』の主要テーマである。ケシロフスキ監督の『デカログ1』では、「死とは心臓の鼓動の停止で魂などない」という大学教授の父と「パパは合理的かもしれないが神はいる」という叔母の間で少年の心の争奪戦が

繰り広げられ、凍結した池で生じた事件を通して標記のテーマが浮び上がる。

## 2. 心に沁み透る言葉

バフチンがドストエフスキ作品の特徴として「ポリフォニー(多声性)」と「カーニバル」を挙げたことは良く知られている。

もう一つの特徴として彼が指摘したのは「心に沁み透る言葉」と呼ぶ究極の殺し文句である。

心に深い傷を抱く人は、こう言ってほしいと思っていたことをいざ言われると、そこに別の意味が生じて衝撃を受ける。典型例として『カラマーゾフの兄弟』でアリョーシャが「兄さん、父さんを殺したのはあなたじゃない」と言ったとき、イヴァンの中に自分は犯人に殺人教唆をしたのではないか、モスクワに行ったのはアリバイ工作と見られないか、という思いが芽生えて動揺する。

同様の場面はすでに小林秀雄が『罪と罰』についてⅡで描いていた。ラスコーリニコフはソーニヤの表情の中に予期せず殺してしまったリザヴェータ(老婆の妹)の「子供のような」表情を見出して戦慄する。それを見たソーニヤが(無言だが)真犯人は誰かを悟る場面もこのヴァリエーションと見て良い。山城むつみ氏はこれらに対する考察を推し進めて、聞き手に生ずる別の意味を「ラズノグラシエ(違和、不協和)」と呼んでいる。

### 3. 『デカログ6』における心に沁み透る言葉

『デカログ6』では、純愛が存在しうるのかが問われる。年上の女マグダと、それを望遠鏡で覗く青年トメク。マグダ「私は悪い女よ」→トメク(愛に苦しむ姿を見ていたので)あなたはそんな人ではないという態度を示す→(性行為に至らず)「これが世間で愛と言うものの正体よ」→トメクは深く傷つく→トメクを傷つけてしまったことにマグダはさらに深く傷つく。こ

れが「ポリフォニー」や「心に沁み透る言葉」の表現なのは明らかだ。

以上のドストエフスキー的演技は高度なもので、マグダ役のグラジナ・シャポウォフスカの演技は素晴らしい。これに匹敵するのは『白痴』の原節子(那須妙子役)=写真=、『赤ひげ』の二木てるみ(おとよ=ネリー役)、『ドライブ・マイ・カー』の三浦透子(渡利みさき役)など数少ない。『二人のベロニカ』への『分身』の影響など、他のケシロフスキ作品にドストエフスキー作品の影響を見ることも可能だ。

『デカログ』が公開された後、ケシロフスキは自著で「私たちの内部にあるものをとらえる」という「目標は文学にとっての一大テーマ」で、「そういう本を書いた」のはドストエフスキーとその影響を受けたカミュ、フォークナー、カフカなどと述べていた。「文学はこれを達成できるが、映画はできない。映画は十分に知的ではないのだ」とも。推定どおり、彼はドストエフスキーに強い影響を受けていたのだ。

一方、映画で奇跡を成し遂げた監督としてタルコフスキー、ベルイマン、フェリーニ、ウェルズらを挙げ、自らも映画により人間の深淵を追及した最高の映像作家の一人となったのである。(いけだ・みつよし)

(参考文献)『ドストエフスキーの詩学』バフチン、ちくま学芸文庫、望月・鈴木訳、1995。『ドストエフスキー』山城むつみ、講談社、2010。『ケシロフスキの世界』河出書房新社、和久本訳、1996。

(Krzysztof Kieślowski, Fot. KRZYSZTOF MILLER)



第98回  
例会報告

ポーランド名画ビデオ鑑賞会

## 『COLD WAR あの歌、2つの心』

2018年カンヌ映画祭監督賞、2019年アカデミー賞3部門ノミネートなど数々の栄冠。日本でもファンを感動の渦に巻き込んだ『COLD WAR あの歌、2つの心』。本会でもPOLE99に誌上座談会が掲載され、ビデオ上映を期待する声が上がっていました。

そこで2021年7月にエルプラザで鑑賞会を計画しましたが、コロナ禍のため2度にわたり延期、10月1日ようやく開催の運びとなりました。

緊急事態宣言解除の翌日で、何人が足を運んでくださるか心配でしたが、会員・一般合わせて19人にご参加いただき感動を共にすることができました。上映後は、作品の時代背景など参加者が思い思いに感想を語り合い楽しいひとときとなりました。

(園部真幸)

### 愛おしい音楽であふれて

映画は滅多に見ないのだが、フライヤーに載っていた座談会の文を読み、見たいと思った。緊急事態宣言などが再三出されたため、三度目の正直での開催だった。

柔らかな素朴なメロディで始まったこの映画はそのあとも愛おしい音楽であふれていた。

鑑賞会のあと参加者の感想を聞く時間が設けられ、歴史や音楽のことなどの豊かな知識とさまざまな視点からの深い洞察に感銘を受けた。感想が聞けて良かったと思った。

私がこの映画で一番印象に残ったのは、映画の最後の部分だ。約90分の映画の世界に浸り込ん

だあと、映像が終わったところで「ゴールドベルク変奏曲」のテーマの部分まるごと流れてきた。これ以上遅く弾いたら止まりそうなくらいのぎりぎりなのだが、先に進んでいくという音のつなぎ方が極限に心地よく、細部の細部まで聴き入った。視界の先には細かくて読めないキャスト名が、こんなに多くの人が関わっていたのかと思うほど延々と流れていく。それを見ながらの「ゴールドベルク」の組み合わせは絶妙だった。



2つの心と4つの瞳 昼も夜もずっと泣いていた 黒い瞳を濡らすのは 2人がいっしょになれないから オヨヨ～  
お母さんに禁じられたの あの人を愛してはいけないと 心が石でできていないから  
あの人を忘れることは出来ない オヨヨ～ 私はあの人を抱きしめ、死ぬまで愛するでしょう。

### 強く深い愛の物語

ポーランドの田舎に伝わる古謡で始まるこの映画は、ポーランドがソ連赤軍によってナチス・ドイツから「解放」された第2次世界大戦後間もない1949～64年までの15年にわたる物語である。

描かれる舞台はポーランドと主にパリ。この時期ヨーロッパは米ソが対峙する冷戦時代で、パヴリコフスキ監督はタイトルを“COLD WAR”とした。しかし「冷戦」は刻まれた時代の記憶であり、描かれているのは「冷戦」の政治状況そのものではない。映画の日本語版には“あの歌、2つの心”という素晴らしいサブタイトルが付いている。“あの歌”によって惹かれ合い結ばれた“2つの心”は冷戦に翻弄され鉄のカーテンで隔てられても、引き裂かれることなく全うされたという強く深い愛の物語なのである。

1949年、物語は地方に残る古い民族音楽の収集に続く民族舞踊団結成のためのオーディションから始まる。団のピアニスト・ヴィクトルは応募したズーラの歌の響きと強い個性に惹かれる。瞬間に2つの心は結ばれ愛を交わす。51年、ワルシャワ公演の成功。上層部の求めに応じスターリン賛歌を演目に加える団長カチマレク、反対するヴィクトル、ズーラも取り込み彼を監視するカチマレク。52年、東ベルリン公演。ヴィクトルはズーラを亡命に誘うが、約束の場所にズーラは現れず、1人で脱出する。

1954年、パリのバー、ジャズ楽団で演奏するヴィクトルの前にズーラが現れる。つかの間の逢瀬。55年、舞踊団のユーゴスラヴィア公演会場へ現れたヴィクトルの失敗。57年、外国人と結婚して母国を脱出、パリに現れたズーラ。二人は愛を確かめ“決して離れられない”と踊る。ヴィクトルはズーラを歌手として売り出すべく、愛人ジュリエットの訳詞で「2つの心…」の曲を吹き込ませる。ズーラはこの都

そして私の心をギュッとつかんだのは、さらに延々と流れるエンドクレジットの中で無音状態が果てしなく続いたこと。全休符が何十小節も続いて最後の休符にフェルマータがついているような終わり方。こんな曲に出会ったことはなかったが、この映画で体験した。無音は音楽以上に強いメッセージを残すという体験だった。そんな感性が好き… (中宮典子)



会的な訳詞に頑なに反発、自分の心がポーランドに深く結ばれているのを悟り、パリに染まったヴィクトルを捨て母国へ去る。

1959年、ポーランドの刑務所、ズーラが訪ねてくる。彼女を追って帰国したヴィクトルは拘束され、指を痛めつけられて15年の刑に服している。

1964年、5年で出所したヴィクトルが舞踊団を訪ねる。今も主役のズーラはカチマレクと結婚し子供を儲け、その代償として夫の政治力でヴィクトルの恩赦を実現してもらったのだ。

ズーラはすべてを捨てヴィクトルとバスで田舎の廃墟の教会へ向かう。二人は聖壇の前で夫となり妻となる誓いを立てる。夫婦となった幸せはこの世にはない。二人は薬を飲み、川の向こうの永遠の世界へと歩いていく。

### “父母に捧げる”



年号が示された各々のシーンはそれぞれ独立した短編小説のように完結していて、全体の物語は独特のオムニバス構成となっている。パヴリコフスキ監督はこの物語を自身の両親が歩んだ人生の軌跡をたどり、繋ぎ合わせて作ったのかも知れない。だから“父母に捧げる”という献辞が映画の最後に提示されて効果的だと思う。苦難の歴史を経てきたポーランド、美しい自然、民衆の中で歌い継がれてきた透明な歌の調べ、そのすべてを体現している美しいズーラは監督の若いころの母のイメージであり、映画は母へのオマージュではなからうか。

斬新な手法と美しい音楽、冷戦時代とはいえマズレク舞踊団の芸術性、優れた俳優たち、それ故にこの映画はカンヌ国際映画祭最優秀監督賞を受賞し、数々の映画賞にノミネートされたのである。(小山内道子)